

# キャンパる

ホームページ <http://my.campal.com/top/>  
メール [campal@mainichi.co.jp](mailto:campal@mainichi.co.jp)

# 心も弾む なわとび愛

## ロープスキッピング全日本選手権3連覇 稲葉海哉さん

### 大楽人



バック転宙返りをしながら五重跳びを披露する稲葉さん。千葉県流山市の江戸川大で

なわとびをしたことがある人は少なくないはず。では、それを発展させた「ロープスキッピング」という競技はご存じだろうか。昨年12月に行われた全日本選手権で個人総合3連覇を達成し、30秒間にかけてあし跳びを105回跳び日本記録も樹立したのが、江戸川大1年の稲葉海哉さん。なわとび界を担う若きエースに、話を聞いた。

本選手権の舞台で、その両目目で1位を獲得した。「なわとび人生が始まったのは幼稚園のとき」。稲葉さんは、競技との出会いをそう振り返る。遊びとして休み時間に跳びはじめ、年中の頃には二重跳びができるまでになった。上手だね、と先生が声をかけてくれたのも、楽しく続けられた理由だそう。

なわとびを競技として応用したロープスキッピング。だが、ただ縄を跳ぶだけにはとどまらない。四重跳びや宙返りなどの技を組み合わせ、パフォーマンスの出来栄を競う「フリースタイル」や、制限時間内で跳んだ回数を競う「30秒スピード」など、競い方はさまざま。稲葉さんは、全日

本選手権の舞台で、その両目目で1位を獲得した。「なわとび人生が始まったのは幼稚園のとき」。稲葉さんは、競技との出会いをそう振り返る。遊びとして休み時間に跳びはじめ、年中の頃には二重跳びができるまでになった。上手だね、と先生が声をかけてくれたのも、楽しく続けられた理由だそう。

いなば・かいや 1999年生まれ、茨城県出身。江戸川大メディアコミュニケーション学部。コミュニケーション1年。スマホゲームが趣味。なかでも「バズドラ」がお気に入りだ。

界への好奇心から、ロープスキッピング教室の門をたたいた。競技を始めた当初は、自分よりうまく跳ぶ同級生たちの存在に、自信をなくした。それでもどうにか小学4年生まで続け、全日本選手権に初出場。年下にも完敗したが、今度はくじけなかった。

普及活動で大切にしているのは、自分が初めてパフォーマンスを見たときのような驚きを届けることだ。観衆の前で跳ぶときは、最初にダイナミックな技を見せる。のちに指導する際にその技を教え、自分でも真外とできると思ってもらおうのが狙いだという。「できる感覚を味わえば、競技を好きになっていく」。勝手に上手に上達していく。

また、ゆくゆくは、指導者として関わっていかんと視野に入れている。選手としての今後の目標を尋ねると「世界大会で一つの種目で1位になるよりも、総合優勝の方が狙える」。虎視眈々と覇座を奪う。

## ライブルは世界

稲葉さんの大学生生活は、多忙を極める。幼稚園教諭になるには国家資格がある。そのため、練習の合間を縫って、幼稚園の実習もしなければならぬ。だが、忙しい毎日だからこそ周りの理解を求めている。実習先で、ロープスキッピングを披露させてくれた先生もいる。何事にも真剣に取り組み姿が、周囲の人から応援を集めるのだろう。

競技については「オリンピック種目になるまであと10年はかかる」と冷静に分析する。またまだなわとび後進国の日本。自分がさまざまな場所でパフォーマンスを行うことにより、競技の普及に貢献したいという。

取材中、準備運動なしで、バック転宙返りをしながら五重跳びをしてみせた稲葉さん。超人的な技にあせんとする記者だったが、当人は「最高でバック転六重跳びまでできます」と余裕をうかがわけていた。

ライブルは世界。ロープスキッピング界の最前線で活躍し続け、指導の場でも日本に貢献していくだろう若きホープから、目が離せない。

### ロープスキッピング

オランダ発祥。スポーツ競技としてのなわとび。一人で縄を跳ぶ「単なわとび」や、

長縄を大人気で跳ぶ「大縄跳び」も種目の一つ。音楽に合わせたパフォーマンスの完成度や、跳んだ回数、跳び続けた時間などを競う。国際ロープスキッピング連盟の加盟国数は、23カ国。